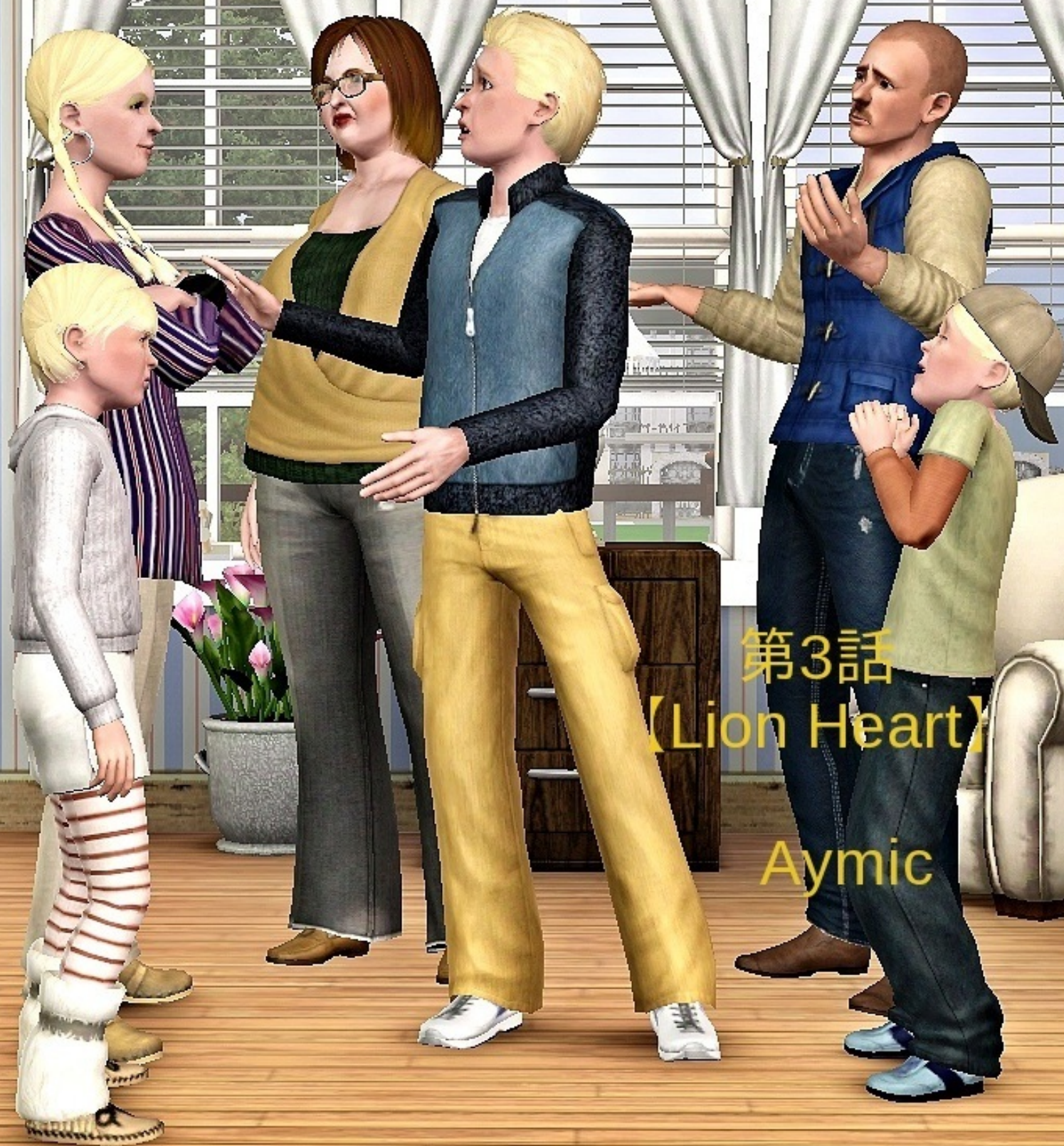


Another Days



第3話

【Lion Heart】

Aymic

★ はじめに。 【Another Days】について。 ★

【ザ・シムズ3】とは、仮想世界に住む人間（シム）を操作し、もう一つの日常生活をシミュレーションして楽しむと言う、2009年6月4日に発売された人生シミュレーションゲームです。 【ザ・シムズ】シリーズの第3作目にあたり、開発元はElectronic Arts(エレクトロニック・アーツ)です。 (※ Wikipedia等、参照。)

◆ この【Another Days】の作品および物語に関わる物は全て、作者個人があくまでも個人的に作成・設定した上でプレイしている物を元に作成した物であり、公式とは一切関係がありません。

◆ 【Another Days】は、当作品作成者であるAymicが個人的にプレイしているプレイデータを元に、その【ザ・シムズ3】のゲーム世界観を、作成者独自の視点でオリジナルストーリー化した物です。

◆ この物語のメイン舞台には、【Hidden Springs (ヒドウン・スプリングズ)】の街データセットを使用しています。 基本的に、実際のゲーム中にあるそれらを使用、またはその名称を表記していますが、一部当方オリジナルの設定や建造物に名称、さらに公式ページを介した共有アイテム等も含む事があります。

物語によっては、各場所が予告無く移動変更して登場する場合があります。 また物語の展開によっては、他の街データセットを使用する事もあります。

◆ お話に登場する人物（シム）達は、私自身がオリジナルで作成した者と、最初から各街データセット中にあらかじめ住人として作成され、配置されている者（既存シム）がおります。

作品中で登場する彼らは、元から設定されていた特質（性格のような物）を参考にした上で、私Aymicが物語を作成する際に興行きや味わいを出させたいという考えから、各シム達には私独自のキャラクター性を設定し、付けさせて頂いております。

◆ 【Another Days】の物語では、実際のゲーム上の世界観（システム）にのっとり、各シム達は性別に関係なく恋愛関係を構築させております。

◆ 予告無く、作品中に登場するオブジェクト等が変更する可能性もあります。

以上の事をあらかじめご了承の上、どうか何とぞご理解頂きますよう、お願い致します。





★ 今作品の主な登場人物 ① ★

■ カイル・レナーバック（主人公）／若年（20代） ■



慈愛心溢れ、穏やかで優しい性格の人物。その上明晰な頭脳をも持つ、超インテリ青年です。
現在は、街一番の大病院に籍を置く第一線の外科医として活躍中。
過去には料理人としてのキャリアも積んでおり、高い知性に裏打ちされた多彩な才能の持ち主。
。突っ走りがちなユージンの、頼れるスマート・ブレイキングシステム役でもあるパートナー。

■ ユージン・ラストン（主人公）／若年（20代） ■



裏表の無い性格で、どこかしらに少年っぽさを残す、やんちゃで奔放な熱血漢の青年です。
趣味である、釣りの腕前は超人レベル。職業は警察キャリア、国際的スーパースパイ（特別捜査官）。

主に、潜入捜査を専門とする“スーパーエージェント”の一人として、日々の平和維持に貢献。
おっとり癒し系なカイルとは正反対の、アクセル全開で元気一杯な彼のパートナー。

★ 今作品の主な登場人物 ② ★

■ ジュディ&ジャック /共に成人（40代） ■



バンチ家は、主人公であるカイル&ユージンとは、子供達を含めて家族ぐるみのお付き合いをしている世帯です。

その一家の母であり妻のジュディは、街の科学研究施設で勤務。しっかり者の、母性溢れる女性。

夫ジャックは、軍事キャリアの幹部職。ユーモア心溢れる、家族志向な男性。

夫の仕事柄、一見亭主関白家庭かと思われがちですが、実際の家庭の主導権はジュディの手中に。

ジュディは、家庭では5人をすべからく統括する、バリバリやり手の肝っ玉母さんと化す毎日。

そんな中、家に帰ればジュディ将軍の下僕として奔走するジャックの健気な姿は、日頃から女性陣に虐げられている息子達の涙を誘ってやみません。

■ イーサン・バンチ /10代（高校生） ■





バンチ家、4人兄妹の長兄。

性格はおっとり、おとなしめ。 読書好きで成績も優秀な、好印象的の少年。

しかしそれが災いしてか、下の3妹弟達からの熾烈かつ過酷な攻撃バトルの餌食となる毎日。

家族達の前では、かろうじて男と長兄としてのプライドを保ってはいるものの、実の兄同然に慕うカイルとユージンの前では、緊張が解けて（？）涙腺が緩くなる事もしばしば。

華のティーンエイジャーにして、早くも苦労性の人生を歩みつつあります。

■ リサ・バンチ / 10代（高校生） ■



バンチ家の長女で、イーサンのすぐ下の妹。

高飛車な言動に加え、何かに付けては反抗的な態度を見せるなど、バンチ家の影の女帝的存在

。特に大人しい兄のイーサンなどは、常日頃から格好のウサ晴らし対象としています。

総じて気の強い少女ですが、行動・決断力の高い面がある事から、意外と頼りがいのあるタイプなのかもしれません。

★ 今作品の主な登場人物 ③ ★

■ ダーリーン・パンチ／子供（小学生） ■



パンチ家の次女。 将来、世界一の女流格闘家かスポーツ選手になる事を夢見、日々家族の男共を相手に鍛錬中。

性格は極めて現実主義。さらに勇敢かつ男勝りな性格で、軍人の父ジャック氏もタジタジ。

男気溢れる気質も手伝ってか、ウジウジしたり弱腰な相手に対しては容赦ない一面も。

常日頃より新しい格闘技の研究には余念が無く、定期的にランダムで家の男性陣を練習台に選ぶのが習慣となっている事から、彼らから恐れられてもいる。

■ アーロ・パンチ／子供（小学生） ■





バンチ家の次男にして、末っ子。

その正体は好奇心の塊で、天性パパラッチの異名を持つ。

些細な変化を見逃さず、頼んでもいないのに果敢にミッションに身を投じる所は、もはや賞賛を通り越し、迷惑以外の何物でもありません。

何かとおせっかいな面もありますが、全ては家族を気遣う優しさから来ている部分があるのかも。

Lion Heart.





「おい！ イーサン」



「なな、今日時間アリ？」



エイダン・マックール：「サブアルパイン・スクエア、寄ってかねえ？ 昨日の夜たまたまネット見てたら、何か再来月末頃にアイドルグループ【**N.S.Z**】の握手会が、このスタジアムであるとかって！ 早速、ライブ情報確認しに行こうと思ってさ♪」



「ついでに、グリルで何か食ってこうぜ。 こっちもチラシで見たけど、新味にサルサ・チキンが出たって言うし。 何か、ウマそうじゃね？」



イーサン・バンチ：「いや。 せっかくだけど俺...、今日はやめとくわ」

エイダン：「え、何で？」



イーサン：「ちょっと、節約しよっかなーと思ってさ。　うち兄弟多いし、小さいチビ共もあるし。　それに、そのうちできればバイト探そうかとも思ってんだ...」

エイダン：「オイオイ。　何今からそんな、所帯染みた事言ってんだよ」



イーサン：「所帯染みもするさ。 何つったって、4人兄弟だぜ？ しかも、俺一番上だし。 いやでもスルーできねえよ。 ま、お前にゃ分かんない世界だろうけどな」

エイダン：「あ、まー…。 しょーがねーだろ、ウチ兄ちゃんと俺の2人だもん」



エイダン：「お前んちって確か...、妹2人と弟1人だっけ？」

イーサン：「まーな」



エイダン：「妹ってったら、1コ下の**B**組にいるリサと、あと小学生のコだよな？ 2人も女の子いたら、結構華やかで良くね？」

イーサン：「そなん全然ねーよ！ むしろ真逆!!」



イーサン：「どんな妄想してっか知らないけど、んなマンガやドラマに出てくるようなパラダイスなんざ、微塵も存在しねーんだよ。　少なくとも、我が家の場合は」

エイダン：「ふーん。　やっぱ、そんなモンかねえ」



エイダン：「でも、男兄弟だけで育った俺としては、ある種永遠の憧れみたいのはあるね。 マンガやドラマとまではいかなくとも、フツーに女姉妹がいたらって考えただけでも。 それだけで、もう和むもん」

イーサン：「月もスターもアイドルも、遠くで眺めるからこそ綺麗に見えるんだよ。 夢を抱くのは、今んところ取りあえず**N.S.Z**の握手会くらいにしとけ」



エイダン：「そーだ。 何なら、今度皆で遊びとか行こうよ。 もし良けりゃ、リサとかも呼んでさ。 俺、元気な女の子とか結構好きな方だからさ。 来てくれるってんなら、大歓迎しちゃうよ」

イーサン：「仮に実現したとして、到底お前の手に負える相手じゃねえ。 寿命なんざ、それこそ確実に軽く**30年**は縮むぞ。 それでもなお希望するってんなら、死んでも恥ずかしくないようキッチリ身辺整理しとけ。 それと、世話になった人達全員に、心残りの無いよう最後の挨拶をちゃんと済ませておくようにな」



イーサン：「そんな...、そんな夢や希望溢れる世界なんかじゃねーんだ！ 俺の人生、この先あとどんだけ生きられるんだろう？ 命のロウソクは、あと何センチ何ミリ残って...」

エイダン：「お、おい、んな大袈裟なコト言うなよ！ 何か...よく分かんないけど」



エイダン：「まあ、リサのそれとかはともかくとして。 今度、何かのイベントの時一緒に遊びに行こうぜ。 それまで、色々調べとくからさ。 面白い物見つけたら、また誘うから」

イーサン：「ああ、ゼヒゼヒ！」



エイダン：「じゃーな！ また明日なー！」

イーサン：「おう！」



“俺は、この街のコミュニティスクールに通う高校生
イーサン・バンチ。

今の話...、聞いてた？

そうなんだよ。ウチって、結構な大家族でさ。”



“話を聞いてた人の中には、
俺と似た境遇の人もいたりするのかな？

もしそうだとしたら、俺の苦労や気持ちみたいのも、
ちょっとは...分かってもらえるかもね。”



“我が家のメンバーは父さんと母さん、
そして子供である俺達兄弟の、
計6人家族。”



“兄弟は、俺を含めて全部で4人。

一番上の俺を筆頭に、
すぐ下には同じ高校に行ってる妹リサがいる。
そこからちょっと年が開いて、
小学生の妹のダーリン、
末は同じく小学生の弟アー口と続く。”



“全員同じ親から生まれた兄弟にもかかわらず、
どいつもこいつもまるで性格が違う。
誰が誰に似てるとかってのは、
いちいち考えた事無いけど。

けど、こうも個性的な連中が、
よくもまあ一カ所に纏めて4人も揃ったなと思うよ。

その中で俺は他の3人に比べたら、
かなり地味だと思う。
個性が弱いって言うか。
...多分ね。”



“そんな俺だけど。

家じゃ一応長兄って事で、
何かに付けて色々頼られたりもする。
両親に、
それと下の3人の妹や弟達からも。”



“—そう。『頼られてる』んだと思うよ、俺。
うん。多分そう...い、いや、そうに違いない！
そうなんだけど、

.....本当か？

ホントにそう...だよな、そうなんだよな!?
そうなんだって、本当に...

本ッッ当に信じちゃっていいのか、オレ!?

こんな....
こんな毎日でも!!?”



イーサン：「ただいま」

次女・ダーリーン：「...おかえり」



母・ジュディ：「お帰りイーサン。 早速だけど、洗濯物あったら出してちょうだい」

イーサン：「え？ あ、うん」



長女・リサ：「ちょっとオカン！ アタシの下着、またゴツチャにして洗ってね？ いい加減、マジでムカつくんだけど!!」



ジュディ：「あら、そうだった？ ゴメンね、今度から気を付けるわ」

リサ：「ソレ、何ッッ回も聞ってるし!! っつーか、そう言ってて一度もやった試しないじゃん!!」



リサ：「アタシのは、他と違って安モンじゃないから！　ってか、大体オス連中やガキ共のクッサーのと一緒にされちゃ、マジで肌腐るっちゅーの!!」

ジュディ：「だから、悪かったって言ってるじゃないの。　それに、そういう事言うんじゃないの。　同じ家族なんだから」

イーサン：（まったくコイツ、毎回人をゴミみたく言いやがって!）←※心の声



イーサン：「母さんの言う通りだぞ、リサ。 お前一人特別扱いが許されると思ったら、大間違いなんだからな」

リサ：「...あ？ ヘタレが珍しくシャベンじゃんよ。 熱でもあんじゃね？」



イーサン：「お前な。　　そう言う態度ばっか取ってると、それ相応の扱いされるぞ？　　いつまでも、ガキみたいなマネしてんなよな！」

リサ：「ガキ？　　ふ～ん。　　そーゆーアニキ、アンタのジュニアもちっとは成長したのかい？」

ジュディ：「リサ！　　下品な事言うんじゃないの！」



リサ：「テストの点数がちょっと良かった程度で、ここぞとばかりにアニキ面されたってしゃーねーし。　ってか、ソレしか威張るネタ無いってヤツ？」

イーサン：「なっ...！」



イーサン：「何だと!!? テメ、ちょっと人が大人しくしてると思っ...」

リサ：「きゃ、こわあ〜い！ おニイちゃん、怒っちゃやあ〜だー」



イーサン：「大体お前、ちゃんと単位取れてんのか!?　んなエラソーな事言うんなら、分厚い本の一つも読んで、次の小論文コンクールで入賞してみろよ!!」

リサ：「ハッ！　おあいにく様。　小論文だけが、勉強じゃござーませんコトよ」

ジュディ：「アンタ達。　それ位にしないと、今晚オカズ一品ずつ減らすわよ」



次男・アーロ：「ショーロンブンって、よく分かんないけど...難しそうだね。 それ、いっぱい本読まなきゃできないの？」

イーサン：「ーっと！ 何だアーロか、どこに隠れてたんだよ？ ったく、イキナリ背後からビックリさせんなよな」



アーロ：「それでにちゃんの部屋、本いっぱいあるんだね！ 机の上に、チェストの上に、それからベッドの下でしょ。あとは...そう！ クローゼットいちばん奥の、くろい箱の中。でもアレ、ぜんぶ写真ばっかだよ？ あんな裸のヒトの写真みて、なんて作文書くの？ にちゃん」

イーサン：「!!! バババ、バカ、シいッッ!!! ってか、おお、お前!! いっ、いつ見たんだよッ!!!?」

ジュディ：「イーサン!？」

リサ：「.....ドエロ」



イーサン：「も、いーからアッチ行ッてろ！ 勝手に人の部屋、入ってくんじゃねえッ!!」

アーロ：「えー!? なんで??」

リサ：「アーロ、言う通りにしな。 ケダモノ菌に感染しちゃうよん」



イーサン：「うるせえ、とっとと失せろ!! ヒマさえありゃ、頼みもしない人のプライバシーを土足で踏みじめるマネばっかしやがって! この、我が家の有害パパラッチが!!!」

アーロ：「うわーん！」

リサ：「アブナイアブナイ! 早く逃げろ〜♪」

「そっちこそ、うるさいッッ!!!」



ダーリーン：「さっきからウツサイつつってんだよ、お兄ちゃん！」

イーサン：「え。 お、...俺？」



ダーリーン：「あたしが宿題してんの、みてるでしょ。 わざとやってんの!?! 邪魔しないで、部屋行ってパソコンでもいじってなよ！」

イーサン：「あ...、ああ、悪かった。 ゴメンよ」



イーサン：「でも、好きで騒いだ訳じゃないぞ!? 元はと言えば、リサが原因...」

ダーリーン：「言いわけしないで！ そんなんだから、ヘタレって言われちゃうんだよ。男らしくない」



イーサン：「た...、確かにそうかもだけど！　けど、ダーリーンだって見てただろ!?　それに、こういう場合のこれは、フカコウリョクって言ってだな...」

ダーリーン：「あーもう、ウザッ！　グチグチいい訳するとか、サイテー!!　新しい必殺パンチ、【ブリッツ・アロー】。　ミゾオチにいっぱつ、ブチこんだろか!!」



リサ：「おや、お出かけかい？ 出るんなら、ついでに【ラデュレ・ド・シム】のカップケーキ買って来てよね」

イーサン：「...どうしてこうも、俺に吹き付ける風当たりは冷たいんだろう？ 俺は日々正直に...、ただただひたすらマジメに暮らしてるってのに一...」



リサ：「あ。 言っとっけど、カロリー高いのはダメだかんね！ 太るから」

イーサン：「しかも、言う事メチャクチャだしッッ!!!!」



父・ジャック：「おっ、どうしたイーサン？ 浮かない顔して」

イーサン：「あ、...お帰り父さん」



イーサン：「.....ね、父さん。 俺ってさ、この家にいる必要...、あんのかな？」

ジャック：「何？」



「俺、最近特に思うんだ。俺は、俺なりにこれでもいつも一生懸命、必死に頑張ってたよ。なのに、皆自分の欲求をぶつけてくるばかりでさ」



「母さんにはいつも叱られて。 リサにはナメられ、アーロにはメンツを潰され、拳句の果てにはダーリーンにまで軽蔑されてー...」



イーサン：「誰も俺の事なんか、考えてもくれやしない！ 俺の存在意義って何なのさ!?! もうまっぴらだよ！ こんな毎日...人生だなんて!!!」

ジャック：「そんな事無いぞ、イーサン！」



ジャック：「この世界、無駄な物など一つもないんだ。　どんな小さな虫ケラや、道端に散らばる砂砂利の一粒一粒さえも、皆等しく神が創造した二つと存在しない、崇高で尊い存在なんだ」



「『ならぬ堪忍、するが堪忍』…。　その昔、とある世界のある国に実在したと言う、きっとの名将が残した言葉だそうだ」



ジャック：「また、力や権力を振りかざすだけが強さじゃない。 歴史でも習ったと思うが、名将と讃えられる者ほど、その言動は極めて質素な物だったとも言う。 この意味、賢いお前ならもう分かるだろう」

イーサン：「意味...？」



ジャック：「人が生きる上における、最大の敵とはエゴだ。 エゴと言う名の魔物の言葉に耳を傾けたがゆえに、その代償として大切な物を見失うのが人の世の常。 だが、そんな悪しき囁きや周りの逆風にも負けず、今日も凜として立つお前は。 真に、我が家の名将と呼べるに値するぞ」

イーサン：「.....父さん」



ジャック：「真の名将、強き男は、一朝一夕にして成らず。 他の誰が何を言おうが、下らんエゴになど耳を貸すな。 ましてや周りの女子供が何を言って来ようとも、一睨みして蹴散らしてやればいいだけの事さ。 俺にとって、お前は何よりの誇りだ」

イーサン：「と...！ 父さん...っ!!!」



ジュディ：「ジャック！　いつまで外でチンタラやってんのっ！　帰ったらさっさと洗濯物出せって、いつも言ってるでしょ！　ただでさえ忙しいってのに、これ以上手を煩わせないでちょうだい！　いつまでたっても、片付かないでしょうがあッ!!」

ジャック：「ハハハ、ハイッ！　今すぐ出しまーっす!!」

イーサン：「うわあああん！　全ッッ然、言ってるコトと違いじゃんよおおお!!!」





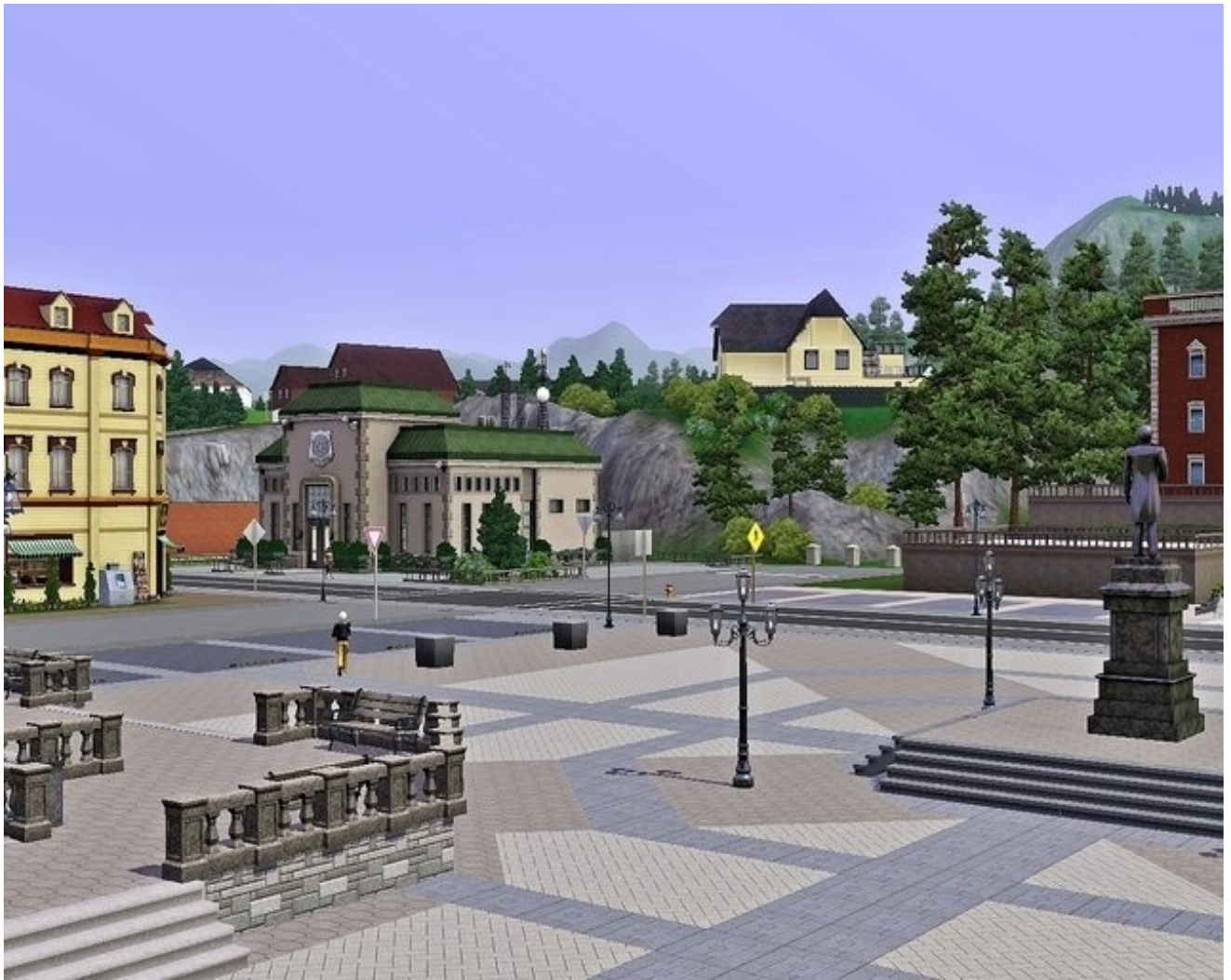
「あ～あ…。　　ったく、ホント何なんだよ、もう…」



「どいつもコイツも、揃いも揃って！ 理不尽な事、この上ねーよ!!」



「大体、俺は兄貴だぞ！ 一番上だぞ!!? だってのにアイツら...、俺を何だと思ってんだよ!!!」



（てめーらなんかより、この俺の方が人生経験上なんだ！ お前らよりも色々荒波に揉まれて来た分だけ、この世の酸いも甘いも知ってた！ にも関わらず。 誰一人として、尊敬のカケラもありゃしない!! こんなんアリかよ!!）



(.....なんて、思うけどー)



（やっぱ...よく考えてみりゃ、尊敬に値する男でも無いよな、俺。　もっと強気に、ガツンとイケる奴だったら良かった。　そうすりゃ、少なくともこんな今よりかはマシな日々を過ごせたかもしんないよな。　そもそも、こんな陰でウジウジぼやくようなショボイ男じゃ。　リサやダーリーンにヘタレ呼ばわりされても、確かに無理ねえよ...）

「一よう！　イーサンじゃねえか！」



ユージン：「どっか行くのか？ 急ぎじゃねえんなら、チクっとこっち来いよ！」

「一...ジーン兄」



イーサン：「お疲れ、ジーン兄。 今、仕事上がり？」

ユージン：「おう。 そう言うお前は、これから遊びか？」



イーサン：「...いや、そーゆーんでも無いけど。別に、これと言ったアテがあった訳じゃないけどさ」

ユージン：「へー、珍しいじゃん。 てっきり、いつもの如く図書館でも行くのかと思ったのに。 お前と言いカイルと言い、俺の周りにゃ本の虫が多いかな。 なぜか」



イーサン：「...まあね。でも俺の場合、カイル兄みたいに凄くないからね。それに、ジーン兄みたくカッコいい訳でも無いし...」

ユージン：「ん？ どーしたよ？ 花の週末だってのに、やけにネガティブ発言じゃねーか。ま、俺がカッコイイのは紛れもねえ事実だけど」



イーサン：「やっぱ...そうだよ、そうなんだよ...。 それに比べたら、俺なんか俺なんか.....」

ユージン：「オイオイ、マジでどーしたよ!? 何かあったのか？ ジョークはここらで抜きにして聞いてやっから、話してみな」



イーサン：「ううっ...、俺、オレ...！」

ユージン：「だー！ デカイ図体して、泣くんじゃねーっつーの！ 俺が泣かしてるみてーじゃん!!」



ユージン：「ったく、イイ歳こいて泣いてんじゃねえよ！ しかも外で!! テメ、恥ずかしくないんか!?! ああ？」

イーサン：「うわーん!!」

ユージン：「だから、泣くなっつってんだろうが！ 聞こえねーのか、このボケ!!」

イーサン：「うわああああん!!」



ユージン：「さて、と。　じっくり話を聞こうじゃねえか」



イーサン：「今さらの、今さらだけど。俺って、つくづくしょーも無い奴だなんて...思ってさ」



「兄貴とは名ばかりで。 実際それらしい事なんか、何一つしちゃいない。 それどころか、ち
っとも役立たずなヘタレで」



「おかげで、リサにはいつもナメられっぱなし。俺の話なんぞ、まるっきり聞く耳無しだ！
ダーリーンとアーロに至っては、生意気な事言われてもまだ小さい分、さすがにマジ切れまではしないけどさ」



「一それでも内心。 やっぱ、やり切れない気持ちと言うか...自分が情けなくなるよ」



「こんな俺でも、一応男で。　それも、一番上だから。　何だかんだでも、最終的にはアイツらを支えて守ってやらなきゃならない。　だけど、こんな俺じゃあ…。　そんな器も、力も無いんだろうって」



「せめて、俺が…。 もっともっと強い男だったらって思う。 誰もが認めるような、心も身体も強い男だったら良かったって、心から思うよ。 強くて、勇気があって、ライオンのように威风堂々とした男に一…」



「そなんだから、俺。 ジーン兄とカイル兄にはマジで憧れてるし、すっげー尊敬してんだよ
」



「ジーン兄は、パワー溢れてて勇敢でいつも輝いてて。カイル兄は、超絶頭良くて何でもできて、おまけに優しくて...。これで、憧れない訳無いよ」



「...だけど、俺は。 そのどっちの、どれも持ってやしない。 同じ男として見ても、本当に悔しい程に理想的だと思うよ、**2人**共。 それだけに、だからこそ俺は、こんなに**2人**を慕って止まないんだろうね」



「俺の上って...いないじゃん？ だから俺。 例え敵わなくとも、**2人**を自分の目標と言うか、ある意味ライバルとでも言うか。 何かに付けては、自分の拠り所にしちゃうんだよ」



「そんな訳で。俺としては、凄く嬉しいんだよ。マジで...、本物の自分の兄貴ができてるみたいでさ」



ユージン：「なるほどな。 ...よし！ お前のその心意気に対し、俺が目一杯の愛情で応えてやるよ。 俺が、お前を強い男に叩き上げてやる。 もう、ヘタレなんて呼ばせねえぜ。 どうよ？ やってみるか？」

イーサン：「え？」



イーサン：「それは、モチロン嬉しいけど。 けど、...そんな簡単にできるモンなの？ しかも、こんな俺でも」

ユージン：「おうよ。 ただし、最終的に成功するしないは、あくまでもお前の心次第だがな」



イーサン：「せっかく、ジーン兄が言ってくれてるんだし。 試しに、ちょっとやってみようかな」

ユージン：「おっし！ んじゃ、決まりだな」



イーサン：「.....でもさ。俺みたいなヤツでも、ホントになれんの？ 努力以前に、根本的かつ先天的な問題があったりとかってオチは...」

ユージン：「何だぁ？ やりもしねえうちから弱腰かよ、オイ!？」



「いいか、イーサン！ この俺だってな、超難関覚悟で警察官になるべくアタックしたんだ。そこで、それこそ血の滲むような努力をした結果、こうして夢をゲットしたんだ。 ダメと思ったら、そこでダメになるんだよ。 人間、何事も度胸と信念！ 同時に高い志と、何より清い心こそがモノを言うんだよ!!」

(学科が難し過ぎて、カイルにカンペ作ってくれって言って、怒られたけどな) ←※心の声



イーサン：「確かに、言う通りだね。　じゃあ、俺もひとつガンバってみるとするよ」

ユージン：「よっしゃ！　そのノリ忘れんなよ」



ユージン：「んじゃ、早速今から訓練を始めっぞ。　ちなみに、万が一の怪我やら後遺症については心配すんな。　うちのスーパードクターが、その辺ちゃんと見てくれるだろうぜ。　多分な。　ま、一応どの辺まで保険適応内なのか聞いとっから、念の為一筆サインもらえっか？」

イーサン：「だ...、大丈夫なの!?　その訓練ってヤツってば、ねえッ!!？」





「.....！」

「.....！!!」



(誰か来てるのか？ 誰だろ、ユージンの声ともう1人...)



(気のせいかな、何だか穏やかな声色じゃ無いような...?)



ユージン：「オラぁ!! この程度でへばってんじゃねーぞ、このヘタレ!! 残り**3**セット！ チンタラやってっと、もう**3**セット追加すんぞ!!!」

イーサン：「え` え` え` !!? そっ...そんな!! ってか、さっき！ あああ、あと**1**セットで終わりだって、言っ.....！ ぐああああ!!!」



カイル：「な...、何...やってんの？ イーサン!？」

イーサン：「ああゝっ！ カッ...カイル兄ーッッ!!!」

ユージン：「チッ、早くもギブってか。 根性ねエ野郎だぜ」



カイル：「何、筋トレ？ 珍しいな。 体育の授業の補足か何か？」

イーサン：「違うよ！ てか、メチャクチャなんだよ！ こんな、アナーキーかつ超スパルタだなんて、これっぽっちも」

ユージン：「単に、テメーがついて来れねえだけじゃねーか！ メニュー1つロクにこなせねえ分
際で、言い訳までしやがって。 ヘボ根性だけは一流でいやがるぜ！」



カイル：「まあ、ちょっと落ち着けよ2人共。　そもそも、どういう成り行き...」

ユージン：「コイツが、ヘタレを卒業したいって俺に相談して来たんだよ。　それで、俺が基礎トレから指導してたってワケよ。　なのにコイツと来たら、自分から言い出したクセして早々とギブ抜かしやがるばかりか、言い訳までタレやがって！」



カイル：「そうか…。　じゃ、次はイーサンの話を聞こうか」

イーサン：「確かに、ジーン兄の話は認めるよ。　俺が早々に、弱音を吐いた事もね。　だけど
俺、全然初心者だったのに、いきなり筋トレメニュー**10**セットは鬼だよ！　しかもこなすにつれて、逆にどんどんセット回数増やされて…。　こんなん、絶対無理だってば!!!」



カイル：「何とな〜く、概略は掴めたよ。 僕的には、初心者であるイーサンの立場に立ったメニューを組んでやるべきだったと思うよ。 日頃から鍛錬してるユージンと、そうじゃないイーサンじゃ、まずスタートラインからして違うし。 いくら効果的なメニューであっても、相手がこなせないんじゃないじゃ水の泡だろ？」

ユージン：「ま、まあな...」



ユージン：「ショーがねえ、筋トレは一旦お預けだ。　ってかテメーの場合、先にメンタル面を叩き上げる必要があると見た。　そこで提案！　後ほど墓地へ赴き、墓地内の探索及び巡礼の儀を命じようと思う」

イーサン：「ええ!!？」



ユージン：「この俺が、お前の為に考えた愛情たっぷりのステキなイベントだ。 日が暮れたら出発すっから、楽しみにしとけ。 それまで自由時間だ。 ま、ジュースでも飲んでマッタリしてな」

イーサン：「い、いいよそんなの!!!」



ユージン：「もしそれまで退屈だってんなら、ウォーミングアップにカイル先生のナビ付きで、病院の遺体安置室ツアーでも行っとくかぁ？ クク...」

イーサン：「ヒーーーー!!! ウォーミングアップで、既に**Max**だぁぁぁ!!!」

カイル：「いや、だから、そーやっていちいち煽らなくても...」

【 シェーディパイン歴史霊園 19 : 06 】





イーサン：「ほっ、ホントにやんの!!?」

ユージン：「ったり前だろ！ だから、こうして来たんじゃないか」



イーサン：「てっきり、ジョークだと思ってたんだよ。まさか本当にこんな...」

ユージン：「自分に都合の悪い事ばっか、ジョークにしようとするじゃねえよ」



ユージン：「とは言え、一応初心者つつ一事で、俺も特別に同行してやる。　ただし時間差スタートだ。　先発で俺が行くから、後に後発でお前が来い。　でもって、この墓地内のどこかに潜る俺を見つけろ。　まあ、狭い敷地だからすぐ分かるだろうけどな」



イーサン：「えっ!!! いいい、一緒に行くんじゃないのッ!!?」

ユージン：「バーカ。 一緒じゃ、訓練になんねーだろが」



ユージン：「とゆーコトで。　ハイ、それではしゅっぱーつ！」

イーサン：「ヒー！　ももも、もう行っちゃうのーッ!!？」



(うう...、やっぱ行かなきゃダメかあ...)



(.....め、...メツチャ怖いよ、こんなん！　こんなコトになるんだったら。　も、いっそずっとヘタレで生きてた方がイイのかも...)



(一おし。 とりあえず行ったな、アイツ)



(さ〜てと、こっからがいよいよ本番だぜ♪)



『ユージン』



カイル：『ホントに...やるの？』

ユージン：『おーよ！』



カイル：『イキナリ荒療治過ぎないか？ そっちは良くて、アイツにはちょっと...』

ユージン：『全然大した事ねーよ。 むしろ、普段のアイツの日常の方が遥かにキツイぜ。 あの過酷なバンチサバンナで、常に3頭の猛獣共に蹂躪される日々を送ってんだからよ』



ユージン：『そこで一つ、新しい風と刺激を送ってやろうって訳。 何だかんだ言って、アイツも男だ。 月夜の下でワイルドなフィールドにおっ放してやりゃ、忘れ掛けてた野性のエネルギーが覚醒するかしんねーぜ？』

カイル：『皆が皆、そうなるとは限らないって！』



ユージン：『とにかく、いっぺんやって損はねえよ。 たまには、ガツンとした起爆剤が必要！
おたくら医療現場だって、そうじゃね？ 死に掛けた所に、高圧電流のショックをズガンと一発与えて復活させたりするじゃん。 それと同じだって』

カイル：『そりゃ、そうではあるけど...』



ユージン：『とにかく心配いらねーよ！ 俺も付いてんだし。 今宵、いよいよアイツが埋もれし真のパワー、【ライオン・ハート】を解き放つんだ。 まあ、別人の如くすっかり変わるアイツの姿。 今から楽しみにしとけよな♪』

カイル：『どうかくれぐれも、ショックで魂が肉体から解き放たれるだとか、変わり果てた姿で戻って来るだとかって事にだけは、絶対にしないでくれよ...』



（よっしゃ。 んじゃ、こっちもいよいよ特殊メイクスタンバイだ。 今夜は一発、眠れる獅子を目覚めさせてやってくれるぜ！）



(はあ.....)



(やっぱり嫌だ、怖いよ！　いくら広くないってったって、場所が場所じゃん!!)



(...ジーン兄には悪いけど。 さすがにもう、これ以上進む気にならねえよ。 怒られてもいいから正直に話して、一刻も早く)



(ここから帰.....)



（ひっ...、引き返すもままならないってヤツかよ、もしかしてっ!?　ここ、これじゃあ...いやでも進むしか、俺に残された道はないってええええ!!!?）



（もももも....、も一限界だっっ!!! こんなんムリだ！ やってらんねえ!! ジーン兄どこにいるんだよ!!?)



(—.....!!?)



「.....おう、...イーサン...か。 良く俺を見つけたな...」



「...お前が来てくれるのを。 ずっと.....ずっと待ってたぜええええ!!!」

「!!!!!!」



「ぎゃあああああああ!!!!」



「!!!!!!」



「お、オイッ!! 大丈夫かよ!?! しっかりしろって、イーサン!!!」



イーサン：「うわあああああ!!!」

ユージン：「あー...、悪かったよ。 ホント！ マジでさ...」

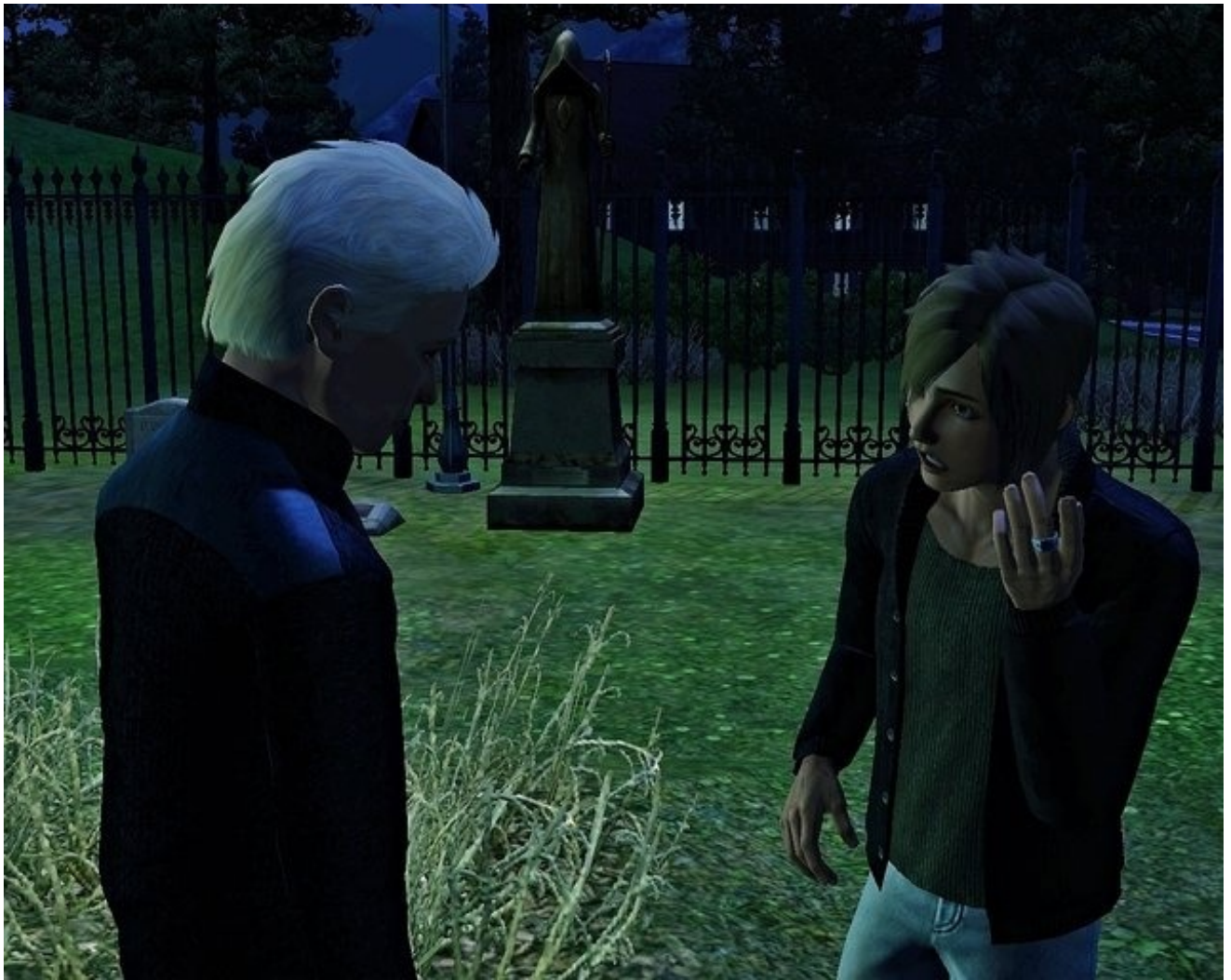


イーサン：「も、いいよッ！ 俺...、もう帰るッッ!!!」

ユージン：「だから、調子に乗ったのは謝るからよォ」



ユージン：「でも。 でもなイーサン、一つだけ...ちょっとだけ聞いてくれ。 いいか？」



「俺が言いたいのは、全ては自分の心次第って事だ。 自分を取り囲む世界は、全て自分の思いが作り出してんだよ」



「例えばな。 何の目的も無く一人でここに来るのと、好きな相手に会いにここに来るのとじゃどうだ？ 後者の方なら、ワクワクするんじゃないか？ 同じ環境や場所であっても、自分の心持ち一つで**180度**世界が変わるんだって事に気付いて欲しいんだよ」



「これは、投影の法則ってヤツさ。 問題を作ってるのは自分自身。 自分の心が注目している物事が、現実の自分を取り巻く世界にも同じく現出して来るってのが、この宇宙の法則なんだよ。 お前の求めて止まない、勇気を得る為のヒントもここにある。 自分をプラスに変えたけりゃ、極力ポジティブ思考に務め、それに沿った行動を積極的に取る事。 これこそが鍵であり、秘訣ってな」



「と言う事でだ。 お前にはもう一つだけ、ぜひともやってもらいたい課題がある」





イーサン：「.....何コレ？」

ユージン：「イイっ!! スッゲー似合ってっぞ、イーサン!!!」



イーサン：「何だよ、このターバンみたいの!? 何の為に...どっから持って来たのさ!!?」

ユージン：「去年の冬の忘年会で、俺が余興で使ったシロモノだ。 お前が勇敢かつ強い心を持つ為に、必要と判断して持って来たヤツよ」



イーサン：「.....ジーン兄。 本当に警察官、...なんだろうね？」

ユージン：「ったりめーだろ！ 警官が忘年会で余興やって、何が悪いよ!？」



ユージン：「ま、ともかくだ。 さっき言った俺の話。 大筋にしろ、ちょっとは掴めたトコあるか？」

イーサン：「一...まあね」



ユージン：「だったら話は早い。　こんな一見オチャラけた事のようにでいて、れっきとしたさっきの話にも沿う、勇気を得るには効果的な方法の一つだ。　ここは墓地。　つまりは人生を終え、この世を去る事を余儀なくされた人達が静かに眠る場所だ」

イーサン：「...だから？」



ユージン：「この世を去ると言う事は、俺達生きてる者だけじゃなく故人にとっても、大切な人達の元を離れてしまう悲しみや辛さで胸を痛める事でもある。　ここは、そんな人達の様々なマイナス的想いで溢れかえってる」



「中には誰も訪ねてくれる事も無く、ずっと悲しみに暮れながら眠らざるを得ない人だっているだろうさ。　そこで、俺は自分達があえてバカになり、皆を笑わせ和ませる事によって、ここの暗い波動を明るくする手助けになればと思ったんだよ。　名付けて、【あなたのお願い叶え隊】。　その願いを叶える精霊は、他でもないお前イーサン・バンチ」



ユージン：「つまり、これは人助けでもあるんだ。　ただ場所柄と相手が相手だけに、ちびっとだけ【勇気】が必要になるけどな」

イーサン：「ー！」



「勇気は力に。そして、さらにそれは大いなる究極愛にも通じてくってコト」



ユージン：「愛は、何物にも勝る最大の力だって言うぜ。　しかも、それは周りに伝播する性質をも持つてな。　初めはたった一人の愛や勇気であったとしても、やがてはどんどん膨らんで、ついには世界を変えちまうんだよ。　俺の言いたい事、分かってもらえたかな？」

イーサン：「……………」



イーサン：「...ごめんジン兄。 ってか...ありがとう。 俺の為にそんな事まで考えてくれて
ただなんて、これっぽっちも...」

ユージン：「おっ。 ちったあ、分かってくれたみてえだな」



イーサン：「今の話聞いて。 何となくだけど、今までに無かった類の勇氣のようなのが沸いてる気がする。 本当にちょっとだけだけど...、今まで知らなかった自分の中の何かが目を覚ましたとでも...言うのかな？ 何か、吹っ切れたような気さえしてるよ」

ユージン：「そう言ってもらえんなら、俺も本望だぜ。 お前をここに連れて来た甲斐が、あったってモンだ」



イーサン：「勇気や強さって言葉が持つ、本当の意味も。　少しだけ、解かり掛けて来たような気もする。　今だったら俺...、もしかすると何だってできそうな気がするよ」

ユージン：「おっし！　　イイぜ、その調子だ!!」



イーサン：「俺、行って来る！　ここの人達とこの場所を、俺の力で最高にホットにしてみせる。
　　よおし...見てろ！」

ユージン：「おうよ！　今のお前、最ッ高に輝いて見えっぞ!!　例え、どんな悪魔やドラゴンが来ようとも！　お前を退ける事なんざ、できやしねーぜ!!!!」



イーサン：「オラァ！ 幽霊でも、冥府の王でも、魔竜でも来てみやがれ!! この俺の愛と怒りを込めたサランダーフレイムが、お前ら全員跡形残らず焼き尽くし、昇天させてやるぜ!!

F●ck!!!」

ユージン：「おう！ そのテンション、下げんじゃねーぞ!!」



イーサン：「いよーっし！ 次はお前だああ!!!」

ユージン：「っしやあああ！ ライオン・ハートの覚醒だぜえええ!! ヒャッハー♪」

【 ...翌日 ... 】



「おはよう、ジーン君。 午前のマッタリしてる所、急に電話しちゃって悪いわね」



「実は、その...ちょっと相談したい事があって電話したの」



「いや、それがね。 イーサンが朝から部屋にこもったっきり、朝食に呼んでもいないとか言
って、出て来ようとししないのよ」



「朝起きて、一度チョロっと居間に出て来てはいたんだけど。その後間もなくして、何を思ったのか大急ぎで部屋に駆け込んだと思ったら、もうそれっきり籠城戦に突入しちゃてねえ」



「一体何が起こったのか、さっぱり見当付かないのよ。 昨日も含めて、起きて来てすぐの間までは、特に変わった様子も無いようだったのに。 で、そう言えば昨日、ジーン君と会ってたのを思い出してね。 もしかしたら、何か知ってるかもと思って電話した訳なの」



「ねぇ、ジーン君、何か心当たりは無いかしら？」







「いや～、分かんねえな～。 昨日の時点でも、別段変わった様子は無かったと思ってたけど」



「あらそう？ ...やっぱり」



「ね、ジュディママ。 さっき、一回フツーに出て来たって言ったよね？」





「ええ」



「だったら...、ひょっとするとそんな時何かあったんじゃない？ 例えばけどさ、リサかダーリンに朝イチで喝入れられたとか、それかアーロお得意のパパラッチ攻撃に合ったとかさ。 アイツ、ガラスなハートの持ち主だけに、ちょっとヨロツと来たんじゃないかねーかな。 後で、同じ男であるジャックダディにフォローしてもらうのも手かもよ」





「なるほど...。　そうかもしれないわね」



「ジャックを使うってのは、効果ありそうね。 男同士な分、腹を割って話せる部分とかありそうだし」





「そうそう」



「ありがとうジーン君。 やっぱり、相談して良かったわ〜」





「いやー、こーんなコトならいつでも☆」



ジュディ：「でも、つくづく色々大変よォ。 こうも大所帯だとね」

ジャック：「一変だなあ」



ジャック：「ジュディ、今日の朝刊知らないか？」

ジュディ：「さあ？」



ジュディ：「あっ、ううん、何でもないの。 こっちの話」

ジャック：「おっかしいな〜...」



ジャック：「リサ、朝刊見なかったか？」

リサ：「知んね。 いっつもオトン持ってんじゃん」



ジャック：「そうなんだけど、それがどこでどうしたもんだか、さっぱり...」

リサ：「ボケたんじゃね？」



ジャック：「ダーリーンは...」

ダーリーン：「知らない。 それより、あとでサッカーの練習付きあってよ」



ジャック：「おっかしいなあ～？ まさか、休刊なんて事でも...無いよな？」

「あっ！ いたいた、パパー」



アーロ：「パパ、探しものしてるんだって？ もしかして、いつもチェックしてるアレ？ だったら、僕知ってるよ！」

ジャック：「おっ！ アーロ、探してくれてたのか!？」



アーロ：「も～。 大事なモノなんだから、しっかりしてよ！ トイレの備品棚にある、いっちゃん奥の箱のフタうらにはって…」

ジャック：（バ、バカ！ シッ!! 俺のヘソクリじゃなくて、朝刊だ朝刊ッ!!!）←※小声

ジュディ：「...とにかく、人間生きてると色々よねえ」



「そうそう。 まあ、俺もエラソーな事言えやしねえけどさ」



「やっぱ、人はお互い助け合わなきゃって思うね。 何だかんだ言ったって、一人じゃ生きて行けねーもん」



「そう言う俺もガキの頃、それこそ毎日母ちゃんに怒鳴られててさあ」



「あん時は、マジでこんな家出てってやるって思ったよ。 いやホントに！」



「けど、今になってみりゃ、母ちゃんの気持ちもちっとは分かるっつーの？ アレじゃ、毎日怒鳴るのも無理ねーなってさ」



「ホラ、俺ってこの通りのキャラじゃん？ これでも、当時に比べりゃ大人しくなったんだよ。
え？ 信じらんない？ アハハ！ そーかもね！」



「まー、とにかくジュディママが心配すんのも分かるよ。 ましてや、イーサンみたいな良い息子ならなおさらさ」



ユージン：「アイツ、大人しくて根が優しい奴だからさ。 その分、周りに心配かけまいと一人で抱え込む所とかあるんじゃないかなって...、時々俺も心配になったりするよ」

カイル：（...!?)



ユージン：「だから、もしこんな俺にでもできる事とかあったら、いつでも遠慮なく言ってよ。
喜んで協力させてもらうからさ」

ジュディ：『ホント助かるわぁ、ジーン君。 これからもよろしく頼むわね。 カイル君にもよろしく伝えてちょうだい』

【ドラッグ中毒？ 新種のマニア？

夜の墓地で、奇声を上げて狂气的パフォーマンスに興ずる、
奇怪なターバン少年出現！】

Another Days

<http://p.booklog.jp/book/97080>

★ 【Lion Heart】 元作作成・mixiページUP年月日 2013.3.10

著者：Aymic

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/aymic1973/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97080>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97080>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ